



～じぶんの町を良くするしくみ。～

赤い羽根共同募金運動は 地域福祉教育のツールのひとつです。

赤い羽根共同募金運動のしくみを学ぶことや運動に取り組むことが、
地域福祉教育の実践につながります。



運動の趣旨

ひとりひとりのチカラは小さくても、集まれば大きな力になるように、赤い羽根共同募金は、自分のまわりで助けを必要としている人に気づき、自分ができることを考え、運動に参加して自分の町を良くしていく「たすけあい運動」です。

ポイント

お金を集めるだけが赤い羽根共同募金ではないこと

- ・ たすけあいの気持ちを集めることが大切です。
- ・ 寄付する人からの「信頼」を預かります。
- ・ 赤い羽根共同募金運動に、「呼び掛けるボランティア」として、また「寄付するボランティア」として参加することが大切です。
- ・ たすけあいの気持ちを、助けを必要としている人の「ありがとう」につなげます。

赤い羽根の身近な使いみち



外出は不安でしたが
車いすのまま乗れる車を借りられて
世界が広がりました



生活が苦しくて不安な子育てですが
ボランティアさんに助けられました



ひとりで暮らしていても
見守っていただいで
安心して生活できます

「ふむふむ程度。」・「活用ガイドブック」の作成には赤い羽根共同募金が使われています。

ちいきふくしの練習帖

ふむふむ程度。

活用ガイドブック

生に関わる学びだから
腑に落ちるタイミングは
人それぞれ。
いつかはわからない
「その時」のために、
自らの視点を揺らす経験を積み、
問いを探り、
さまざまな考えが
あることを知る。
そんな変化に寄り添う
地域福祉教育でありたい。





はじめに

ヘレン・ケラーのよく知られた言葉に「アンラーン(unlearn)」があります。「学びほぐす」、つまり、型どおりのセーターを身につけていることに気づき、これをほぐして自分に合わせて編み直すことと解されています(鶴見俊輔『新しい風土記へ』より)。

最近になってこの言葉が注目されているのは、知識や技術を身につけるといふ現代の指向性に対して、どこかでこれをリセットして、自らの生活や人生を見つめ直すことの必要性が謳われているからなのでしょう。

さて、福祉教育には教科書がありません。参考書也没有。定型の対象も方法也没有。誰も身近な〈くらし〉や〈地域〉のいとなみに関心を寄せる時、そこから無数のテーマが生まれ、対話が深まり、新しい風景が広がっていきます。福祉教育のはじまりです。

長く福祉教育は、「体験教育」にシフトしてきました。車椅子体験やアイマスク体験等は老いや障がいを身近に感じる簡便なツールでした。しかし、体験の中に意味や理解を閉じ込めてしまうと、それは誤解や偏見に変わるおそれがありました。

省みて、〈いのち〉も、〈こころ〉も、〈からだ〉も、よくわかっているようでとらえどころのない言葉です。でも、私たちにとってはかけがえのない生きる力につながるテーマです。ましてや病や老い、発達等の話題は、立ち止まって考えてみるほどにその理解は深まっていくことでしょう。

これまで身につけてきた知識や価値観を少し揺らしてみると、新たな気づきが生まれたり、異なった視点を重ねることができるでしょう。生きることの意味を自分の言葉で語り、互いの言葉で伝え合うことこそ、福祉教育が求めている「アンラーン」なのです。

もくじ

「ふむふむ程度。」制作の考え・構成について	2
授業組み立てのポイント	3
1 つながりが増えるってどういうことだろう?	4
2 人も町も変わるけれど、「変わらない」もあり?	7
3 あたりまえだと思ってたなあ?	10
4 人生で「旬」は一度きりなのかな?	13
5 ちがっていてもふつう?	16
「ふむふむ程度。」番外編	17

参加型体験プログラムを通じた地域福祉との出会い直し

タイトル「ふむふむ程度。」について

この副読本は、授業を受けたそれぞれの人が、さまざまな経験をする中で考え、成長することを前提とし、明解な答えの提示を敢えて避けたつくりとなっています。

「そうか!!」ではなく、「ふむふむ、そんなことも“あり”なのか」という気軽なスタンスで、投げかけを受け取ってもらいたいという思いから、「ふむふむ程度。」というタイトルがつけられています。



「ふむふむ程度。」制作の考え

「ふむふむ程度。」は、地域福祉教育のための副読本として刊行しました。中学生でも住民でも、手に取ってページを開いたならば、ありふれたエピソードの中に大切な気づきがあり、思いがけない風景があり、日常の話題や発見にもつながっていくことでしょう。

エピソードは、他者との〈出会い〉の間で生まれ、紡いでいくことができます。一人ひとりの体験や関心がエピソードにつながり、そこから新たなエピソードが生まれていく、そんな期待の中でそれぞれのテーマが展開されます。問いや答えが自らの感性を通して生まれ、仲間との語らいの中に見つかる、そんなシナリオのない副読本を編んでみました。

「ふむふむ程度。」の構成について

副読本には独立した5つのテーマが用意されています。テーマ毎での授業実施を想定していますが、複数テーマを連動させることも可能です。

各テーマは、「扉」「ビジュアル」「エピソード」「？(投げかけ)」から構成されています。生徒個々による解釈や読み解きを重視し、思考や対話を広げるきっかけとなるようにつくられています。5つ目のテーマ「ちがっていてもふつう？」のみ、各自のタイミングで目を通すことを想定し、他と構成が違ってきます。

また、各テーマの間には「みんなに聞いてみた」として、中学生に投げかけた質問に対する直筆の答えを並べています。考えるきっかけとしたり、類似(もしくは反対)の意見を知ることにもなりますが、同年代であっても様々な意見があることがあたりまえであることを示す意図から、このページを用意しました。

扉 —— 学びの方向性と幅を提示

各章のタイトルは、考えの広がりを限定してしまわないよう「コミュニティ」や「防災」等といった言い切りを避けています。授業の終わりに、疑問形となっているタイトルに回答する形で、考えをまとめるという使い方もできます。

- ・扉に出てくる女の子が自問するセリフが各章のタイトルとなっています
- ・その章で触れてもらいたい内容についての補足が左下に書かれています

ビジュアル —— 導入と思考の広がりを補助

テーマを元に作成したイラストや写真を提示しています。

エピソード —— 言葉による思考の補助

ビジュアルの解説となるエピソードを掲載しています。(3つ目のテーマ「あたりまえだと思ってたなあ？」については対となるエッセイ)

？(問いかけ) —— 思考と議論の入り口

ビジュアルとエピソードをベースとした問いかけが、それぞれ3つずつ用意されています。これらを投げかけとして使用していただけますが、他の投げかけを創作していただくことも可能です。

「みんなに聞いてみた」(p.8、18、24、30) —— 同年代の考えを参照する

「『地域』とは何だと思えますか」「『命』をほかの言葉で」「生きていくために必要なことは」という質問に対する同年代の生徒の答えを掲載しています。

また、「はじめに」と奥付ページの背景には、同様に「今、熱中しているものは」に対する答えを配置しています。

授業組み立てのポイント

学びのポイント

福祉は困っている人を手助けするというイメージが先行しがちですが、地域や人の日常の中には「顔見知り」「ご近所」「声かけ」等という地域福祉と関係する要素があり、これらが非常時において有効な働きをすることが実証されています。

授業後、日常生活で目にしているいつもの光景やなじみのある物、人とのつながりを、新たな視点から捉えることが目標です。

各々の性格、家族構成、経験などによって考え方や受け取り方に違いが生まれますが、成長に応じて「変化」していくことも踏まえ、一度立ち止まって自分なりに福祉を考える機会にしていきます。

組み立てのポイント

- ・各々の着眼点から自由に発想を膨らませる
 - ・議論を通じた発想の交換から、自分にとっての学びを見出す
 - ・自分に引き付けてイメージできるように促す
 - ・言語化することが難しい内容も想定できるため、発言が苦手な生徒のことも配慮し、書き込みの時間もつくる
 - ・組み立ての段階から地域の社会福祉協議会(以下、「社協」という)や団体等から情報提供を受けたりしながら、地域福祉の実態とすり合わせる
- <事後の展開>
- ・副読本での学びを事前学習と捉えることで、体験学習や実践的な学びをより効果的に組み立てることができる
 - ・必要に応じて地域活動や社協の取組と連動させた展開が可能となる
 - ・社協と連携し、地域内の活動に参加する等、地域の方々とのコミュニケーションや体験によって、学びに実感を持たせて膨らませることができる

地域での広がりをつくるために

- ・地域の社協、スクールコーディネーターに相談してみる
- ・地域福祉やまちづくりに取り組む団体と連携する
- ・町の人と連携することが上手なアーティスト等に相談してみる
- ・各市町社協の取組を参照する

静岡の地域共生社会実践紹介



つながりが増えるって どういうことだろう？



テーマの趣旨について

地域コミュニティの希薄化が課題とされる昨今において、「地域のつながり」「顔の見えるコミュニティ」が良いものとして紹介されるケースが多くあります。一方で地域コミュニティとの距離の取り方やその方法は地域毎に違いがあると共に、わずらわしさが伴う難しい側面も持っています。

また、地域に生まれ育つ中で、気が付くと「コミュニティの一員」として周囲から扱われるようになります。「コミュニティ」や「地域のつながり」について、自分なりの考えを持つ前にその一員になってしまうことが戸惑いにつながることもあります。

この章では、コミュニケーションが自然発生しやすい状況において、地域内のゆるいつながりが形成されたエピソードを元に、地域のつながりについて考える機会とします。

ねらい

- ・現時点での自分と地域のつながりを考える
- ・どのような地域のつながりがあるか見直す
- ・地域のつながりが、住民の暮らしにとってどのようなものか知る
- ・自分と地域のつながりの未来をイメージする

委員からひとこと

音楽がかかれば、何となく自然に体が動いてしまう、誰でも一度は経験したことのある「ラジオ体操」。ラジオ体操の歴史は古く、終戦間もない時期から朝のラジオから流れてくるあの音楽は、夏休みには欠かせないものでした。ラジオ体操カードをもって広場まで眠い目をこすって行った記憶が蘇ってきます。西伊豆町では、そんな懐かしさを感じながら多くの方がラジオ体操に参加してくれています。介護予防・健康づくりの目的でスタートした「ラジオ体操」が、地域コミュニティ作りの新たなツールとして活用されています。(藪田)

エピソードの解説

(「ふむふむ程度。」P6)

あらまし

- ・高齢化率県下No.1の西伊豆町で、住民自ら取り組めるような健康維持・介護予防活動を行政・専門職・住民で検討したことから、ラジオ体操の実施が始まった
- ・もともと介護予防と閉じこもり防止を目的としてスタートしたが、地域内で予想以上の広がりを見せたことで、見守り活動に発展した
- ・「そこに行けば誰かに会える」という認知が広まり、見守り活動と同等の効果が発生した
- ・住民の健康意識が高まり、ラジオ体操以外の健康づくり活動と、見守りに繋がるサロン活動も活発になった

ポイント

- ・体操が始まる前に参加者同士の「おしゃべりタイム」で情報交換(おしゃべり目的の参加者も出てくる)
- ・余白の時間を設定することで目的外の効果が誘発される
- ・顔見知りが増えたことで、互いを気に掛ける気持ちが引き出され、「ゆるい」つながりが醸成される

福祉からのまなざし

有事の際の助け合いや、トラブルの未然防止、学び合いや情報共有等、地域生活を送る上で「つながり」は重要な役割を持ちます。ここで紹介したエピソードは、「つながり」を保持する役割を誰か一人が負うのではなく、全体として地域を見守る目が自然発生している点に福祉的価値があると言えます。世代や所属にとられない定期的な人の集まりがあることで、人の変化に気づく目を増やすことにつながり、さまざまな情報の共有・交換も起こります。

地域の「つながり」は、個人レベルだと大切さとわずらわしさが入り交ざりますが、ここでは少し俯瞰した目から、地域にとっての「つながり」はどんな社会をつくり、自分の周囲にどのような影響を与えているかを考える機会としてください。

問いかけ



(「ふむふむ程度。」p7)

公園の入り口にいる猫は何をみているのだろう？

イラスト内の誰かだったり、人の集まり全体だったり、思い思いの想像に任せるが、なぜそこに目を向けているのかまで深めることで、想像と背景の読み解きをセットにした思考を展開する。

「コミュニティ」ってどんなつながりなのかな？

「コミュニティ」は、まちづくりの文脈では「地域共同体」を指すことが多いが、同質の人や団体の集まりを指す使い方もあり、そうした区別も意識しながら「人のつながり」を広く考察する。

「あいさつ」、これもつながり？

日頃、何気なくやっていることの象徴として「あいさつ」を取り上げ、授業内容と日常生活をつなげて捉えるひっかけをつくる。ただ形をなぞっただけでよいのか、あいさつし合うだけの地域の人は自分にとってどんな存在なのか、毎朝遠目でお互いに存在を認識し合っている相手とはあいさつをしていないことになるのか等、一歩踏み込んで考えてみる。



問いかけ
その他の？

- ・イラストの中から一人を選んで、心的心声を想像してみよう（周囲の人の様子も参考に）
- ・イラスト内にどんなコミュニケーションがあるかな？
- ・この公園に悲しい気持ちの人はいるかな？

授業の組み立てに際して…

学びづくりのヒント

- ・地域とのつながりを、人の属性を意識して見直す
- ・良いことだけでなく、悪いことにも目を向ける
- ・「つながり」という物差しで地域の日常を見直し、気づきを発見する

キーワード

#ご近所みんなで #今日も会えたね #大きくなったね #あの人最近見ないね
#息子の所に行ったってよ #新しい朝が来た #ラジオ体操 #ゆるいつながり
#井戸端会議 #声掛け

検索ワード

静岡県市町別高齢化率 少子高齢化率 介護予防 閉じこもり防止
地域のつながり コミュニティづくり コミュニティデザイン

発展アイデア

- ・地域で行われているラジオ体操に参加し、参加者にインタビューする
- ・人が定期的に集まって行われている地域活動を調べ、地図にマッピングする



2

人も町も変わるけれど、「変わらない」もあり？

テーマの趣旨について

進歩や革新の歴史によって現在の私たちの暮らしはつくられてきましたが、先行きを予測することが難しいと言われる現代では、新しい物や手段をより強く求める傾向があり、自分自身を向上させたり、変化させることは前向きで良いことだと捉えられます。しかし一方で、我々は長く変わらない物事に価値を見出す視点も持っており、継続されることに対して敬意を抱くことも多々あります。

この章では、人や町の多様なあり方について、「変わること」と、「変わらないこと」を並列させ、それぞれの価値について自分なりに考えてみます。

ねらい

- ・地域の変化や変わらない物事に向けるまなざしを育む
- ・長年地域で続く活動、取組、行事などの背景にある思いを想像する（知る）
- ・変わること、変わらないこと、それぞれの良い点、悪い点を考える
- ・良い、悪いといった評価にどのようなことが影響しているかを深める

委員からひとこと

私たちの暮らす地域にはいろいろな人がいますが、あたりまえすぎて、その存在に気づかないこともあります。しかし、人は困った時や不安な時、そして何かを必要とした時、あたりまえと思っていたものを尊いと感じたりします。

そのひとつが、毎朝、地域の子どもを見守る人の存在です。

その人は、どこのだれだろう。いつからはじめたのかな。はじめたきっかけは何だろう。続けている理由はなんだろう。様々な疑問が頭に浮かび、考えるほど大切な存在だと気づきます。

みなさんの地域には、尊くて大切だと思う人はいますか？ （加藤）



エピソードの解説

(「ふむふむ程度。」P16)

あらまし

- ・交差点で、子どもたちの登下校をいつも変わらず見守る人がいる
- ・見守りながら、子どもたちとコミュニケーションをとっている
- ・天候に左右されずいつもそこにいてくれる
- ・名前は知らないけれど、その変わらない活動に感謝の気持ちを持つ

ポイント

- ・あたりまえのことになってしまいがちな変わらない物事には、継続につながる思いがある
- ・見守られていたという経験の積み重ねが、子どもたちの中に、地元は安心できる場所というイメージをつくっている
- ・旗振りと同時にコミュニケーションをとることで、子どもの安全を守る以外の効果が生まれる

福祉からのまなざし

私たちの暮らす地域には絶えず変化があり、常に新たな取り組みが生まれますが、一方でさまざまな人の支えあいによって地域が成り立つことには変わりはありません。そのような変わらない物事はいつしかあたりまえのこととして、変化の中に埋もれてしまいがちです。変化が地域にとってどのようなことをもたらすかを考えると同時に、地域にすでにある人や活動にもあらためて目を向ける機会としてください。

問いかけ

?の意図

(「ふむふむ程度。」P17)

最初と最後のイラストで、どのような変化がありますか?

イラストの中から目に見える変化を間違い探しのように探ることを入口として、変化が生まれた背景、変化がもたらした物事を想像する。また、今後起こるかもしれない変化を予想してみる。

町が変わってほしくないところ?

地域の残ってほしいと思う物事を考えることで、自分が何に価値を見出すかを知る。今から10年後まで等と期間を決めると、10年後の自分と照らし合わせることができ、考える取掛かりができる。

町への思いを伝えるとしたら、何を伝えようか?

いろいろな人が暮らし様々な活動がある町を総体として見る。広く捉える視点に立ち、自分と町のつながりに思いを巡らせながら、セリフを考えてみる。

その他の?^{問いかけ}

- ・イラストの町にはどんなボランティア活動があるでしょうか?
- ・あなたが旅人だったとして、この町に何日くらい滞在してみようと思いますか?何をして過ごしますか?
- ・旗振りをしている人はいつから活動を始めたのでしょうか?

(どんな人、始めた理由など、どこまで深掘りした想像ができるか挑戦してみる)

授業の組み立てに際して…

学びづくりのヒント

- ・目に見えることだけにとらわれず、見えないことにも想像をふくらめる
- ・授業後に自分の町を新鮮な目で見るができるようになることを意識する
- ・課題や設問によって目的や意識の持ち方に違いを持たせ、目を向ける先の変化から新たな気づきにつなげる

キーワード

#通学路 #10年後の夏 #ボランティア #見守り #子ども #じゃんけん #ハイタッチ #緑のピブス #いつもいる #赤い羽根

検索ワード

見守り活動 ふれあい協力員 コンパクトシティ 住みやすさランキング センシユアシティ(感応都市) コミュニティスクール 赤い羽根共同募金

発展アイデア

- ・地域で子どもの安全のために活動している人たちにインタビューし、逆に彼らのために自分たちができることを探る
- ・自分の通学路にいる人や、活動、建物を調べて絵を描いてみる
- ・自分の通学路にある危険な場所を探し、安全にするためのアイデアを考える



「赤い羽根共同募金って何?」の調べ学習

～じぶんの町をよくするしくみ～

- アプローチ 1 「ふむふむ。程度」p10～15の中に赤い羽根が隠れていないか探してみましょう
- アプローチ 2 私たちのまわりで、助けを必要としている人、困っている人はいませんか
- アプローチ 3 赤い羽根共同募金は、どんな仕組みで、どのように使われているのでしょうか
- アプローチ 4 自分たちが活動に参加する場合、どんな方法があるのでしょうか
- アプローチ 5 募金の呼びかけや寄付も大切ですが、自分の町をよくする方法を赤い羽根を通じて考えましょう

<学習効果> 人を助けることの大切さに気づき、生徒のおもいやりの心を育てる

赤い羽根共同募金のホームページから募金の使いみちを探すことができます。
社会福祉法人静岡県共同募金会ホームページ



あたりまえだと 思ってたなあ？

テーマの趣旨について

あたりまえの物事に価値判断をつけることは困難で、世の中には白黒はっきりしないことが多くあります。また、日々の暮らしを送る中では、身の回りに何があるかですら見過ごしがちで、何か事が起こった時に初めてその存在や価値に気づくというケースも珍しくありません。

この章では、日常的に出会う周囲の人や物事に改めて目を向け、自分にとってのあたりまえの物事が、どのような存在かを考える機会とします。災害が地域の日常に与える被害は被災体験のある方々や地域の人たちと共有することができるものですが、個人的な事由によるインパクトも同様に日々の暮らしのあたりまえを揺るがす体験になりえると考え、災害時に限定しない展開を期待しています。

ねらい

- ・想像力を膨らませて、個々の認識する日常を拡張する
- ・あたりまえが揺るがされた他者の気持ちを想像する
- ・真正面から向き合うだけでなく、時には意識から外すことも選択肢にあることを知る

※被災体験や個人的事由等によって、つらい現実と向き合わざるをえない経験をした生徒に配慮した組み立てが必要。場合によっては全体としての授業では扱わない。

委員からひとこと

私自身、日常が繰り返されるのが、あたりまえになっていた。しかし、昨年台風では、たった数時間の出来事によって、自宅での生活が戻るまでに1年以上かかってしまうほどの被害があったという話が身近なところにあった。「おはよう」と起き、食事をとる団らんのスペースが数時間の雨で泥だらけになり、翌日からは、2階のスペースで家族がかわるがわるの食事をとることになり、生活を維持しているのがやっとだったという。

身近にある「あたりまえ」の風景が、実は一つひとつが奇跡なのかもしれない。そんな出会いを大切に、皆さんの身近な所に目を向けて頂ききっかけにつながればと思います。 (永井)

エピソードの解説

(「ふむふむ程度。」P22)

写真の背景

- ・台風の影響により、床上、床下浸水の被害が発生
- ・被災した家から運び出された椅子が赤い橋にそっと置かれている。数日前にはどこかの家で団らんに使われていたものかもしれない
- ・赤い橋は、住民が日常的に行き来し生活をつないでいた場所。支援に入った災害ボランティアが手すりや欄干を一生懸命磨き上げた

ポイント

- ・近年では、台風における土砂災害が頻発し、たった数時間の出来事で、今まであたりまえだった日常が目の前から消えてしまう
- ・地域が日常生活を取り戻すには長い時間がかかる。そんな中でなんとか生活しなくてはならない人たちには三者三様の思いがある
- ・赤い橋は壊れたわけではなかったため、被災後も通常通り渡ることはできていたが、きれいに磨き上げられたことは、住民の心を打つ出来事だった
- ・災害に限らず、「つらい」と感じる時にも似た状態になることがある



福祉からのまなざし

災害時においても、日常生活においても、「いのち」がなければ何かすることはできません。まずは自分の命を守ることが一番です。災害を通じていのちの重さを考えるきっかけにしてください。

また、屋根のある家、ご飯が並べられる食卓、学校から帰ってくる場所といった普段あたりまえの日常は、災害によって一瞬にして失われてしまいます。しかし、そのようにインパクトのある出来事であっても月日が経つにつれて忘れられ、風化してしまいます。

問いかけ

? の意図

(「ふむふむ程度。」P23)

イスに座っていたのはだれ？

イスが使用されていた状況をできるだけ詳細に想像してみることで、自らの日常との照らし合わせが自然発生することを期待し、普段ならあたりまえ過ぎて注目されない日常へ意識を向ける。

つらい時に逃げるのはおくびょうなことかな？

困難な状況への対処を自らで狭めてしまわず、ケースによって選べるように、クラスの様々な意見を聞くことで選択肢を広げる一助とする。

あなたの町の中でやさしい場所は？

普段は町に対してあまり使わないであろう「やさしい」というフィルターを通じて町を見つめ直すことでの発見を促す。



問いかけ その他の？

- ・ この椅子を目の前にしてあなたは どうしますか？
- ・ 椅子を自分の大切なものに置き換えて気持ちを想像してみましょう
- ・ 自分が一番に守るものは何だろう？
- ・ あたりまえのものの中で自分の心の支えになっているものはありますか？

授業の組み立て
に際して…

学び
づくりの
ヒント

- ・ 日常や生きていることをどうとらえるかを考える機会にする
- ・ 価値を見つけることにとらわれず、普段意識の外にあるあたりまえの物事を探ることに重きを置く
- ・ まずは自分の心と対話し、その心情を他者に置き換えるようにして想像する

キーワード

#いのち #復興 #想定外 #足湯 #生活再建 #避難所 #ふるさと #被災
#助け合い #つながり #避難訓練 #絆 #まちの風景 #思い出 #見直す

検索ワード

災害ボランティアセンター 災害支援事例集 災害時のこころのケア
いのちの電話 グリーフケア

発展
アイデア

- ・ ハザードマップの気になる場所に出かけ、風景をスケッチする。
- ・ 町を歩いて、置かれているものや捨てられているものを探し、その使われ方や背景を探る。

4

人生で「旬」は 一度きりなのかな？

テーマの趣旨について

「旬」というと、野菜や魚に対して言われることが一般的です。あたりまえですが、そこではおいしく食べるためということが前提であり、それと同時に、「逃したら戻ってこない」というニュアンスも含まれています。一方で、人生の「旬」という使われ方も時々目にします。その前提や含意はケースによって違いがありますが、こちらでも「一度きり」をイメージすることが多くないでしょうか？

また「若い」についても、無意識に若さと比較し、マイナスに捉えてしまいがちです。

この章のエピソードには、「今」を前向きに生きるおばあちゃんが登場します。ここでは、「今」が連続する人生において、自分も気づかぬうちに生まれてしまう思い込みを解きほぐし、自分らしく生きるための心持ちを考える機会とします。

※ビジュアルページでは、機を逃さないものの象徴としてアイスクリームを扱っています。

ねらい

- ・ 思い入れを外して、自らが年を重ねることを考える
- ・ 世代の違う人の自分らしさを想像する
- ・ 「今」を主体的にポジティブに評価する

委員からひとこと

目には見えませんが、福祉は私たちの暮らしと共存しています。

「あなたにとっていつが旬ですか？」

あなたにとっても、わたしにとっても、それは「今」であってほしい。それは、性別・国籍・年齢・障がいのあるなしに関係なく、優劣もなく、否定されずに一人ひとりが尊重され、地域で自分らしくあたりまえの生活を営むことができているということの現れではないでしょうか。（渡邊）

エピソードの解説

(「ふむふむ程度。」P28)

あらまし

- ・施設で生活することになったおばあちゃんを孫が訪ねる
- ・環境が変わって不便していないか心配する
- ・孫の心配をよそに、今が「旬」だとおばあちゃんは言う

ポイント

- ・老いることや施設に入ることを無意識にマイナスにとらえてしまっていた
- ・若く、健康な時にしか「旬」はなく、一度きりのものだという先入観があった
- ・置かれた境遇が他人から見てマイナスに見えても、幸福度の判断は本人のもの

福祉からのまなざし

地域福祉教育でよく実施される疑似体験プログラムによって、高齢や障がいの不便さに焦点があてられ、「歳はとりたくない」「介護/介助が必要で大変だ」といったマイナスな気持ちや、「ケアしなければいけない」という一方通行の関係性を助長してしまうことに懸念があります。

困っている人に手を差し伸べることはもちろん悪いことではないのですが、「共に生きる力」を育む地域福祉教育は、行動の手前にある一人ひとりの人権を尊重する心持ちを育むところから始まります。それは、健常者が障がい者や高齢者を知るといった構図ではなく、地域に暮らす住民同士として一緒になって地域を住みやすくする働きかけをする等、共に生きる視点の模索を繰り返すということです。

問いかけ

?の意図

(「ふむふむ程度。」P29)

人それぞれの「旬」はどんなものでしょう？

年齢による固定観念を外し、それぞれが「旬」だと感じる状態の想像を通じて、自分や世間一般の価値観に縛られない物の見方をする。

年れいを重ねることの楽しさは何だろう？

想像が追いつかないことも予想されるため、多少ふざけたアイデアも含め様々な意見を出し合い、そのリストを見ながらのディスカッションを通して、グループで想像を深めていく。

人が決める「旬」、自分で決める「旬」、なにがちがうんだろう？

人のどのような面に目を向け「旬」だと評するのか、自分で自らがいい状態だと捉える時と比較することによって、「今」を前向きにとらえるヒントや自分らしさを探る。



問いかけ

その他の？

- ・あなたの「今」はどんな「旬」を迎えている？
- ・周りには、どんないきいきしたおじいさん、おばあさんがいる？
- ・あなたにとって幸せとは？

授業の組み立てに際して…

学びづくりのヒント

- ・「こうあるべき」等、自分の中にある思い込みを解きほぐす
- ・自らの現状を肯定的に捉えるコツを探る
- ・異なる価値観を理解できるか否かに執着せず、尊重に目を向ける

キーワード

#旬 #自立 #自己決定 #かわいそう #QOL #ウェルビーイング
#人権の尊重 #LGBTQ #尊厳 #わたらしさ #生き方

検索ワード

ICF(国際生活機能分類) 貧困的福祉観の再生産
どのように生きるか自分で選べる

発展アイデア

- ・歴史上の人物や有名人などの年表を見ながら、その人の人生の浮き沈みを想像し、良い時だけに限らず、どんな「旬」があったかペアになって想像する
- ・自分が生まれた時から未来までの年表をつくる(シェアは必要なし)
- ・地域に暮らす高齢者のライフヒストリーを聞き書きし、グループもしくはペアで意見交換

ちがっていても
ふつう？

テーマの趣旨について

当初、LGBTQに関連したテーマ設定を検討していましたが、個人的で繊細なテーマであることや、生徒たちが多感な時期であることを考慮した結果、この形となりました。構成についても他テーマとはそろえず、副読本を受け取った一人ひとりが自分のタイミングでページを開き、同世代の言葉とつながりを感じてもらいような使い方を想定しています。

副読本p.32、33には、「しあわせってなんだと思いますか？」という問いかけに対する中学生の考えの答えを掲載していますが、人の多様なあり方を、さまざまな「しあわせのかたち」を通して感じてもらいたいと考えています。その時々で気持ちがつながる言葉に違いがあったり、ずっと気になる言葉があったり、それぞれだと予想されますが、ふとした時に安心する場所のように開くページになってほしいと考えました。

ねらい

- ・ 人の意見の多様さを実感する
- ・ 周りと違うことに対するざわつきを緩和させる
- ・ その時々心の拠り所になる

しあわせの
かたち

「ふむふむ程度。」番外編

参加型プログラムを通じた
地域福祉との出会い直し

ここでは「ふむふむ程度。番外編」と題して、生徒たちが楽しみながら自分の暮らす地域を探索し、再発見する「参加型プログラム」のアイデアを提案します。

「ふむふむ。程度」を使った授業で触れた視点を自分のまちなに向け、観察したり、地域の人と交流したりといった行動を通して、理解を深め、学びを定着させることがねらいです。日常の中にある地域福祉を発見する「まなざし」を育むプログラム例としてご覧ください。

実施に際しては地元の社会福祉協議会にご相談の上、自治会、市民活動団体、企業など各所と連携・協働することが成功の鍵です。

参加型プログラム実施の流れ

- < 役割 >
- 生徒…プログラムに主体的に参加する
 - 学校…地域と連携し、生徒をサポートしながらプログラムを運営する
 - 地域の人…さまざまな形で企画・実施に協力してもらう

0) 準備

次ページのアイデア集A・B・Cから、どれを実施するか決める。
社会福祉協議会をはじめ各所に相談し、協力者を集めるなど必要な準備をする

1) ウォーミングアップ

自分のまちを舞台にしたロールプレイング・ゲームのような感覚で、ちょっと変わった「リサーチ(下調べ)」に挑戦します。まちや人と普段とは少し異なる行動・関わり方をしてみることで、生徒たち自身の発見はもちろん、地域の協力者との出会いが期待できます。

- ① 生徒を4名前後のチームに分ける。
- ② 学校周辺の地図と、末尾の「ふむふむクエスト」を配布する。
- ③ 決められた時間内で地域を自由に歩き回り、クエストを行ってもらう。
各チームに担当エリアを割り振ってもよい。
- ④ 感想や気づいたことを話し合う。

※原則としてクエストの文言は書き換えないでください。

2) 参加型プログラムの実施

生徒たちがウォーミングアップで得た気づきや発見を活かしながら、学校と地域が協力して参加型体験プログラムを実施する。

3) ふりかえり

後日、ふりかえりの会を持つ。“他人の発言を否定しない”というルールで、自由に体験や感じたことを話してもらい、生徒同士が対話するよう促す。協力してくれた地域の人にもアンケート等を通じてコメントをもらおうとよい。またプログラム終了後に「ふむふむ程度。」の「?(投げかけ)」に戻って再度ディスカッションすることで、より実感を伴った意見交換が期待できる。

[0]準備は学校と地域が連携して行ってください。[1]ウォーミングアップはこれまで見過ごしていた地域福祉に目を向けるための準備運動です。[2]実施では一般的なプログラムよりも、生徒自身が考え、行動する範囲が大きく設定されています。生徒の主体的な参加を促すことで、豊かな経験・思考の過程となるでしょう。時間が限られる場合は[1]ウォーミングアップだけを抜き出して、“実践編・簡易版”として行うことができます。

アイデア

A

難易度 ★★★

「ご近所ふむふむツアー」

概要

生徒が地域で見つけた「ふむふむ。」を巡るツアーをつくる。実際にツアーを実施し、生徒がガイド役をつとめる。

- 1 生徒が「ふむふむクエスト」を使って地域を歩き、関心を持ったもの・人・場所をできるだけ多く見つけてくる。
- 2 見つけたもの・人・場所を「ふむふむスポット」として、それぞれに絵や写真、タイトル、説明文を付け、クラスで発表する。他チームは必ずコメントや質問をする。
- 3 各チームおすすめの「ふむふむスポット」を選び出し、全チーム分を合わせてひとつのツアーを組み立てる。選ばれた全スポットを地図にプロットして、ツアー経路を考える。
- 4 「ふむふむスポット」に選ばれた人や場所に許可を得た上で、現地でツアーを実施する。ガイド役は各チームの生徒がつとめる。他クラスの生徒・先生、近隣住民などに「ツアー客」として参加してもらうと盛り上がる。

解説

前出「実施の流れ2」ウォーミングアップ」で生徒それぞれが発見した地域福祉の要素を、他の生徒やツアー客に自分の言葉で紹介することを通じて、観察や理解を深めます。またツアーに対して寄せられる感想・反応（フィードバック）から達成感を得たり、自分とは異なる視点に気づいたりする体験が期待できます。



アイデア

B

難易度 ★★★★★

「はじめましてキッチン」

概要

生徒が地域に住む人の自宅の台所を訪ねて、一緒に得意料理を作る。ご近所さんも招いて、みんなで食事をする。

- 1 学校や社協が、協力してくれる地域の人（チーム数と同数）をあらかじめ見つけておく。
- 2 各チームの生徒が、渡されたメニューとレシピに沿って材料を買いに行く。それを持って、チームごとに割り当てられた地域の人を訪ねる。
※メニューとレシピは事前に地域の人からもらっておく。学校が材料を用意してもよいが、地域の人に準備してもらおうと生徒が受け身になるおそれがある。生徒が材料を持参するのがポイント。
- 3 地域の人に教えてもらいながら、生徒たちが一緒に得意料理を作る。
- 4 約束の時刻にゲスト＝ご近所さん・お友達など（1名～複数）に訪問してもらう。
- 5 生徒、地域の人、ゲストと一緒に作った料理を食べる。

解説

「料理」「食事」という行為を介することで、短時間での関係構築を促進し、より豊かな対話を引き出すという意図があります。あらかじめ地域の人にメニューを決めてもらう際、その人の思い出や地域特性にちなんだものにしてもらうと、会話を広げやすいでしょう。
地域のつながりが失われ孤独が社会問題化する現代において、暮らしの場を開いてもらい、そこに思い切って飛び込むことで、地域に新たな交流や居場所が生まれるかもしれません。



アイデア

C

難易度 ★

「このまちの宝さがし」

概要

生徒が地域内のつながりを辿りながら、地域の人たちの「宝物」と出会う。

- 1 学校や社協が、協力してくれる地域の人（チーム数と同数）をあらかじめ見つけておく。
- 2 生徒たちが地域の人を訪ねて趣旨を説明し（学校が依頼書を用意してもよい）、「他の人にとっては重要ではないけれど自分にとっては大切な、あなただけの宝物を見せてください」とお願いする。宝物を見せられながら、それにまつわるエピソードや大切な理由をインタビューする。許可がもらえれば、絵や写真でどんな宝物だったか記録する。
- 3 その人に頼んで「宝物を見せてくれそうなお近所さん」を紹介してもらう。次の人に会いに行き、同じようをお願いする。もし断られたら、別の人を紹介してもらう。各チームが3つの「宝物」を見つけ、インタビューできればミッション完了。
- 4 チームごとに自分たちが見つけた宝物について、クラスで発表する。

解説

趣味嗜好の似た人同士が繋がりやすいSNSと異なり、「地域」とは多様な背景や価値観を持った人々が隣り合って暮らす空間です。誰かのごく個人的な宝物やそれにまつわる人生の断片に触れることで、身近に暮らす人々の多様さを実感すること、互いの価値観の違いを尊重する心の芽生えが期待できます。

体験プログラムを
つくってみよう

これら3つのアイデアを参考に、独自のプログラムをつくるのもおすすめ。アイデアが生まれたら、さまざまな人とタッグを組んで、地域特性や学びのねらいに即したものとなるよう、企画をブラッシュアップしましょう。

地域住民と
やってみよう

校内限定のプログラムではなく、地域住民を広く対象として実施することもできます。さまざまな世代や背景の人の混ざったチームにすることで、お互いの気づきが広がります。

参加型プログラム アイデア集



ふむふむクエスト

地図を見て歩きながら、チームのメンバーと一緒に、以下のうち3つ以上を行うこと。できるだけたくさん挑戦してみよう。

- 1 道で出会った人、全員にあいさつしよう。話しかけられたら、立ち止まって話をしてみよう。
- 2 以前から顔は知っていたけど話したことのない人に話しかけてみよう。
- 3 3分間、全員いっしょにスローモーションで歩いてみよう。終わってから、歩いているあいだ何に（におい、音、肌や足の裏の感触、感じたことなど）気がついたか話そう。
- 4 人間以外の生き物を見つけて、その動物の一日を想像して話し合おう。
- 5 気になるおじいちゃん・おばあちゃんに自分たちと同じ年齢のときどんなことをしていたかインタビューをしてみよう。
- 6 道で出会った人を呼び止めて、好きな歌を教えてもらおう。できたら、その場で歌ってもらおう。
- 7 「やさしいもの」と「やさしくないもの」を探し、メモしておこう。あとで、なぜそう思ったのか、どうすれば「やさしくない」が「やさしい」になるのか話し合おう。
- 8 家族や友達ではないご近所さんに、お金のからない贈り物をしてみよう。*1*2
- 9 じぶんが覚えている限り、昔から今までずっとそこにあったもの・いた人を探そう。

※1: 私有地や公共施設の敷地内のものを勝手にとっては
いけません。
※2: 相手のことを思っている行為も贈り物にすることができます。

気をつけること

- ・安全第一。交通ルールを守り、車や通行人にぶつからないよう気をつけてください。
- ・地域の人のプライバシーを尊重し、できるだけ挨拶をしましょう。
- ・発見や感想などを話し合いながら歩くのはOKですが、声の大きさに気をつけましょう。



石神夏希
劇作家

国内外の様々な土地に滞在し、街中や田園風景の中、お店や家といった生活の場を舞台に、その土地で暮らす人たちが本人のまま登場する演劇を創作・上演している。企業や行政と協働し、演劇的な手法を用いて日常生活や街を再発見するワークショップや、文化芸術を通じたまちづくりプロジェクトも手がける。2020年より静岡在住。

過去に滞在制作を行った都市：北九州市、高松市、横浜市、気仙沼市、マニラ（フィリピン）、メルボルン（オーストラリア）、台北（台湾）、東京都豊島区など。県内での主な活動：「きょうの演劇」（主催/静岡市）、「弱法師」（主催/SPAC・静岡県舞台芸術センター）他。

ちいきふくしの練習帖

ふむふむ程度。 活用ガイドブック

組み立て、
展開づくりのご相談は、
お気軽に
お近くの社協へ



発行

社会福祉法人静岡県社会福祉協議会
〒420-8670 静岡県静岡市葵区駿府町1-70
TEL:054-254-5224 FAX:054-251-7508
http://www.shizuoka-wel.jp
E-mail:spcsw@shizuoka-wel.jp

発行日 令和5年9月

【新たな地域福祉教育副読本制作作業部会委員】

部会長 増田 樹郎（静岡福祉大学学長）

委員 二宮 奈緒子（HAHAHANO.LABO）

永井 紀子（社会福祉法人浜松市社会福祉協議会天竜地区センター 副地区センター長（CSW）北部地域リーダー）

鈴木 莉玖（社会福祉法人島田市社会福祉協議会地域つながり推進班書記）

加藤 慎也（社会福祉法人富士市社会福祉協議会地域支援係係長）

渡邊 麻由（社会福祉法人長泉町社会福祉協議会事務局主査）

藪田 栄和（社会福祉法人西伊豆町社会福祉協議会事務局地域福祉主任）

編集、デザインプロデュース

鈴木 一郎太（アーツカウンシルしずおか）

デザイン 二宮 奈緒子（HAHAHANO.LABO）

企画協力 石神 夏希 p17-20

イラスト 二宮 奈緒子（HAHAHANO.LABO）表紙,p8,9,17-20

柏森 たま。 p1,4,7,10,13,16

asako unno p5,6

近藤 ユキエ（写真）p14,15

助成 赤い羽根共同募金（社会福祉法人静岡県共同募金会）

鈴木一郎太 アーツカウンシルしずおかプログラム・ディレクター

ロンドンから帰国し、NPO法人クリエイティブサポートレッツにて障がいと社会を横断する事業企画に携わった後に独立。様々な分野の事業主体の思いを整理し、最適なアウトプットを形作る企画・コーディネートを行う。副読本、ガイドブックの制作にはディレクターとして参加。2021年より現職。NPO法人こえとことばとこころの部屋理事。愛知大学講師。

近年編集に携わった冊子：「ちいきふくしの練習帖 ふむふむ程度。」（社会福祉法人静岡県社会福祉協議会）、「共生社会のマナビ 障害者の生涯学習支援入門ガイド・事例集」（文部科学省）、「劇場のワークショップファシリテーター養成講座」（公益財団法人豊橋文化振興財団）等